



3月14日の「水素爆発」と発表された3号機の爆発の様子

講演■川根眞也

内部被ばくを考える市民研究会代表

日時■ **10月23日**(日)
13:00 開場
13:30~16:00

会場■富士見公民館

参加費■500円

(子供、学生は無料)

主催■

10.23 川根講演会実行委員会

問い合わせ先■ 090-4429-0527(澤田)
090-8109-2954(山川)

□富士見公民館アクセスマップ

鶴ヶ島市富士見 5-11-1 / 電話番号 049-287-1661



内部被ばくを避けるために

子供たちを放射能から守る！

福島原発事故によりまき散らされた放射能は広島原爆の160個分以上といわれています。トンデモナイことが起こってしまったのです。

ところで、「放射能の内部被ばく」ってご存知ですか？25年前のチェルノブイリ事故の追跡調査から分かってきたのですが、すごく怖いのです。しかし、公的機関はいまだにそれを無視しています。それに、行政がいう「基準値以下だから大丈夫」というのは信用できません。

基準値そのものが原発推進者たちの圧力により緩められているからです。食物の安全基準はドイツでは4ベクレルなのに、日本はなんと500ベクレルなのです！



川根先生の話聞いて、
今から対策を講じないと、
子どもが将来大変なことになる恐れがあります！

(欧州放射線リスク委員会のバズビー委員長の警告を見て下さい / 裏面に掲載)

川根先生はさいたま市立中学校の理科の先生ですが、民間の内部被ばく研究の第一人者です。また、首都圏の放射能を測定し、「放射能から子供を守ろう！」と県内各地を講演に回っています。国会の議員会館でも報告しました(8月8日)。

とくに子育て中のお母さん(むろんお父さん)そして学校給食に関係している方々も、富士見公民館にお越し下さい。先生が分かりやすく説明して下さいます。

《参考》

欧州放射線リスク委員会 クリス・バズビー科学委員長の警告

「ICRP の健康基準なんか、信用してはいけない」
（『週刊現代』8月6日号より）

「被曝は、“あらゆる病気”を引き起こします。免疫システムに悪影響を及ぼすので、感染症に罹りやすくなり、インフルエンザに罹っても死んでしまう可能性がある。甲状腺もやられてしまいます。精神疾患や子どもの知能低下、心臓麻痺など循環器系の病気、呼吸器系の病気、さらには女性の不妊や、関節炎や歯が抜け落ちてしまうといったレベルまで、様々な健康被害を発生させる可能性がある。」

『週刊金曜日』（7月8日号）より

化学物理学者のクリス・バズビー氏は、日本政府が原発事故被害者の放射線許容量を決める際に使ったICRPの放射線リスクモデルを批判する科学者たちの最先頭に立つ。バズビー氏によれば、ICRPモデルの問題点は次のことにある。ICRPモデルはあらゆる被曝の仕方を同じように、あたかも外部被曝であるかのように扱う。そうして求めた被曝線量に、広島・長崎の原爆生存者が受けた急性の大量外部被曝量を基にして決めたりリスク因子を掛け合わせる。

このように、ICRPモデルは、体内に入ったある種の放射性核種が、細胞内の決定的な標的 (critical targets)、特に細胞のDNAに非常に高い放射線量を浴びせる可能性が幾通りもあるということを考慮に入れていない。その可能性のひとつが、「鼻や口から体内に入ったホット・パーティクル」によるもので、「それは非常に微小な粒子で、細胞組織の中に入りこんでその細胞に多量の放射線を浴びせることもありうる。」その結果、内部被曝は、ICRPモデルによる推定より千倍近く危険である可能性がある。内部被曝も勘案するECRRモデルを使ったバズビー氏の試算によると、福島第一の100km圏内に住む330万人が一年間留まると仮定して、50年以内に約20万の超過ガンが発生するだろう。そして、そのうちの半数は10年以内に発症するだろう。これに比べ、ICRPモデルでは、100km圏内では2,838 (人) のガン (患者) が増えると推定する。チェ

ルノブイリについての多くの研究がICRPモデルの予測よりずっと多いがん発症数を示していると指摘する。

さらに、チェルノブイリ事故の影響は半径200km圏にとどまらない。日本では、福島第一の近くで「微量のプルトニウム」が検出されたという報告がある。これは驚くにあたらない。なぜなら、3.11の地震と津波の後、米国環境庁が、ハワイ、グアム、アラスカ、そして西海岸で尋常でない量のプルトニウムとウラニウムを検出したからだ。

…福島事故の2週間以内に放射性物質が北半球全体に拡散され、4月半ばまでには南半球にまで達した。日本のメディアがこの問題について沈黙を守る…

「サンデー毎日」9月18日号が、「都心に潜むチェルノブイリ級」と題して、放射能防御プロジェクトの関東土壌調査の特集を5ページに渡って組んでいます。その中で川根先生は「セシウムの検出場所には“セシウムの相棒”といわれるストロンチウム90が同時に存在する。ストロンチウムは骨に沈着して腫瘍や白血病の原因になると考えられており、ストロンチウムの調査を早急に行うべきだ」とコメントされています。



群馬大学の早川由紀夫教授が4月にまとめた福島第一原発から半径300kmの放射能汚染地図の改訂版

10.23 川根講演会実行委員会

共同代表：澤田洋 (富士見2-32-28 hsawada@tcat.ne.jp)、山川恵利子 (中新田22-4, 090-8109-2954 e_ymkw@yahoo.co.jp)
実行委員：石塚雄康 青木 亘 田口幸央 石川正臣 (富士見) / 鈴木勝行 田原廣美 (南町) / 古牧英子 (中新田) / 松村和子 (下新田) / 柳戸次郎 (町屋) / 田部井緑 (松ヶ丘)